

相愛大学学生生活実態調査報告（その6）

——1990年度 海外語学研修参加者に関わる諸問題——

The Sixth Report on the Survey of Student Life at Soai University

——Some Problems Concerning Participants in the 1990 Overseas English Program——

長野 孝 男

I 諸 言

相愛大学における学生生活のすごし方の特徴を明らかにし、教育全般また厚生補導、健康指導の一層の充実と発展を図るために始めた本研究も6回を数えるにいたった。

今回の調査は、相愛大学学生の海外語学研修参加者の生活全般について調査することにした。

今回の語学研修の舞台となったのは、アメリカ、コロラド州首都デンバーで、アメリカ中西部一の大都会でもあるおちついた静かな町である。そこは海拔1マイル（1.6km）の高地にある“Mil High city”とも呼ばれる地で、7・8月の最高気温は、23度、最低6.5度という統計が示すごとく乾燥した高原型の気候である。夏でも朝夕は肌寒く感じる気候であったことをまず報告し本研究を進めることにする。

本学の海外語学研修もまだ第四回という浅い歴史だけに、大学側にとってもその実施場所や形態、さらにはその内容をどのようにするかは、現在暗中模索の段階といっても過言ではなからう。

今回、海外語学研修の付添の一人として参加し、これからの海外研修が一層飛躍、発展することを願い本研究を実施しすることにした。

本研究は、学生の語学研修、ホームステイの実態を単に外部から眺めるだけではなく、学生の中に入り、学生と同じ条件で生活し実態を理解し、それぞれ学生の健康状態、出発前後の心理的变化、また本プログラムに参加した学生の参加目的についても明確にしようとした。

よって本研究の目的は、相愛大学学生の海外語学研修参加者のさまざまな生活実態を正確に把握し今後の海外語学研修の課題を明確にするための基礎資料を得ようとしたものである。

Ⅱ 研究方法

1. 調査日：第一回調査 1990年7月8日（本大学教室）
第二回調査 1990年9月4日（オレゴン州ホテル）
第三回調査 1990年8月17～9月4日（各ホームステイ先）
2. 調査対象：本学学生（人文学部）英米文化学科1回生2名 2回生8名 3回生7名 計17名
3. 調査内容：海外語学研修全般に関する7つの項目 ①参加目的 ②不安度 ③健康調査 ④研修効果 ⑤ホストファミリーとの生活 ⑥英語授業評価 ⑦性格検査 からなる調査用紙を配布し、回答を求めた。そのうち、健康調査の変数30項目と参加学生の性格検査については今回はのぞき研究を進めることにした。
決定された6つの変数については、「語学研修参加目的」「出発直前の不安感」「プログラム終了後の効果」「健康調査」「ホストファミリーとの生活」「英語授業程度評価と楽しさ」から構成されている。
4. 結果の整理：集計にあたっては、大阪大学大型計算機センターのSPSS (Statistical Package for the social sciences)プログラムを使用した。集計の一部については、パーソナルコンピュータを使用した。

Ⅲ 結果と考察

1. 海外語学研修参加目的

大学が開催する本プログラム（海外語学研修）に学生達はこういったことを目的に参加してきたかを把握するために、Table 1 に示す8項目について回答をもとめた。上位よりみると参加者のすべてが、「海外の生活、文化を知るために」「若いときにいろいろな体験をしたいから」本プログラムに参加していた。また、外国で「英語を実際に使ってみよう」とした目的で参加した学生が94.1%いた。そして語学研修と同時に海外旅行もしたいとしたものが同じく94.1%いた。さらに本プログラムで「英会話を身につけたい」としたものが88.2%存在した。

Table 1 このプログラム（海外研修）に参加した目的について（％）

	おおいにおもう	ややおもう	どちらでもない	そうおもわない
海外の生活・文化を知るため	100	*	*	*
英語（会話）を学ぶため	82.5	5.9	5.9	*
若いときにいろいろな体験をしたいため	100	*	*	*
英語を実際に使ってみるため	94.1	*	5.9	*
海外に友人をつくりたいため	76.5	23.5	*	*
海外旅行をしたいため	94.1	5.4	*	*
自分の力を試すため	64.7	23.5	11.8	*
親や友人にすすめられて	29.4	35.3	35.3	*

2. 出発直前の不安度

「アメリカ語学研修出発まじかにあたり、次の項目にどの程度の不安を感じているか」の質問に対する回答を Table 2 に示した。比率の高いものからみると、「自分の英語力」についての不安度が高く、「おおいにそう思う」と「ややそう思う」をあわせると、全員が自分の語学力について不安をいただいていることがわかる。学生にとっては海外生活の経験もなく当然のことと思われる。

Table 2 不安の程度調査（％）

	おおいに そう思う	ややそう 思う	どちらで もない	あまりそう 思わない	ぜんぜんそ う思わない
自分の英語（会話）力	82.4	17.6	*	*	*
ホストファミリーとの生活	41.2	52.9	*	*	5.9
アメリカ社会での生活	23.5	41.2	*	17.6	*
大学での勉強	17.6	35.3	35.3	11.8	*
事故や病気	11.8	17.6	11.8	35.3	23.5
健康生活	11.8	5.9	23.5	35.3	23.5
食事や食べ物	11.8	23.5	35.3	23.5	5.9
ホームシック	*	52.9	17.6	29.4	*

次に「ホストファミリーとの生活」についても「おおいに心配」「やや心配」をあわせると、94.1%のものが不安を抱いていた。

「アメリカでの勉強」については「不安」「やや不安」としたものが52.9%存在していた。

また、3週間以上日本を離れるにあたって、「ホームシックになりはしないか」の不安を抱くものが52.9%いた。

質問の最後に語学研修出発にあたり本プログラムに対する希望、要望、意見を求めたが、

ほとんど回答が得られず、一部の学生が、「無事に日本につれてかえって下さい」という消極的な文章が目につくのみであった。

出発前1～2週間はかなり、不安と緊張を示し、身体の変調を訴える学生も多数みうけられた。

以上のことから、出発真直前に参加者全員を集め集団として心理的に安心感を与えるような事前教育（オリエンテーション）を持つことが本プログラムを一層効果的にするものと思われた。

第2回調査は、9月4日（最終日）オレゴン州、ポートランドのホテルにて実施した。本調査にあたり、参加者全員をホールに集合させ、「これから実施する調査は、今後のホームステイのための参考資料をえることを目的とした調査である」ことを説明し、協力を求めた。

3. プログラム終了後の効果

海外語学研修終了後の調査をした。出発前に抱いていた参加目的をどの程度獲得出来たかについて回答を求めた。その結果を Table 3 に示した。これら結果と出発直前に実施した調査 (table 1) を比較してみたところ、次のような結果が fig.1 で見られた。

全員が「海外の生活、文化を知るため」本プログラムに参加したが研修後は、「大いにそう思う」が76.5%、「ややそう思う」が23.5%となった。当初の目的はほぼ達成されたと言えよう。

また「英語力を身につけるため」本プログラムに参加した94.1%の学生のうち、研修後は58.8%が希望がかなえられたとした。

そして「若いときにいろいろな体験をするため」とした全員のうち88.3%の学生が、「アメリカでいろいろと体験することが出来た」といっている。

Table 3 語学研修の効果 (%)

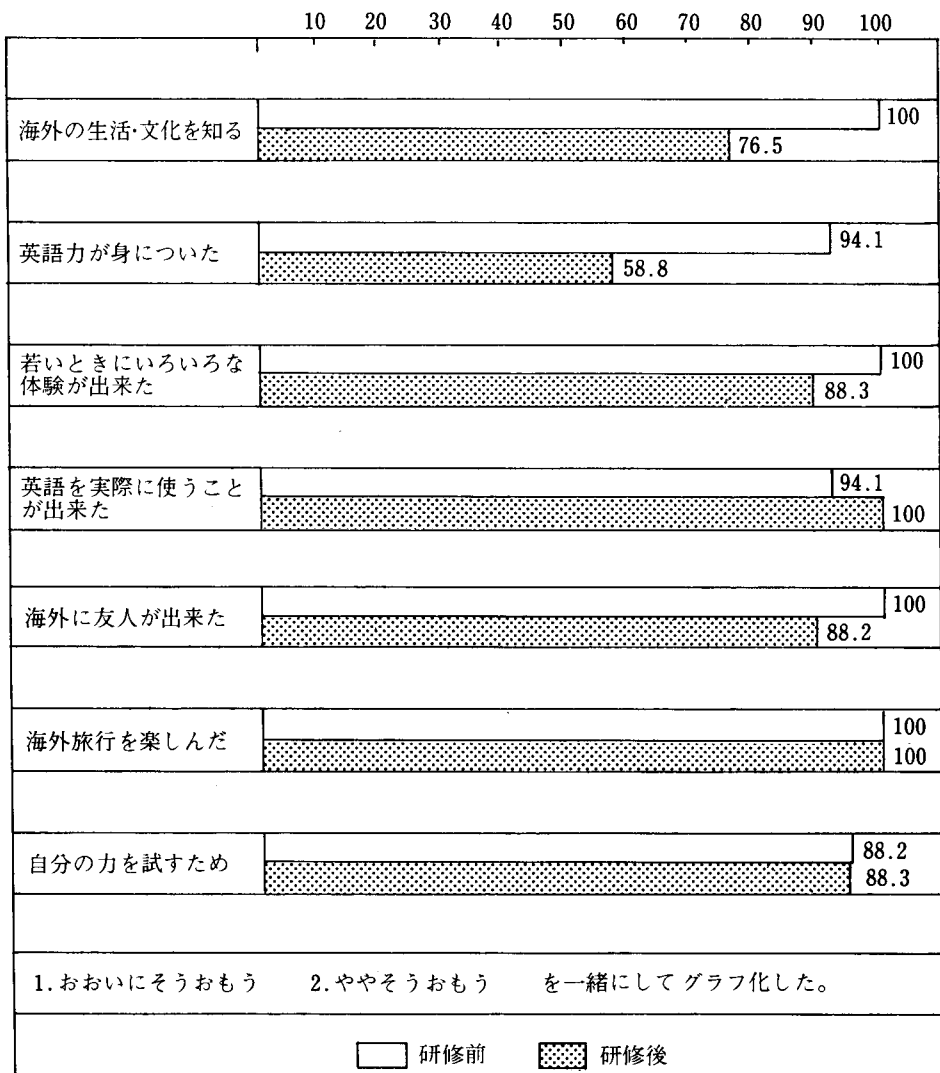
	おおいに そう思う	ややそう 思う	どちらで もない	あまりそう 思わない	ぜんぜん 思わない
海外の生活・文化を知ることが出来た	76.5	23.5	*	*	*
英語（会話）力が身についた	*	58.8	11.8	29.4	*
若いときにいろいろな体験が出来た	76.5	11.8	5.9	5.9	*
英語を実際に使うことが出来た	70.6	29.4	*	*	*
海外に友人が出来た	52.9	35.3	11.8	*	*
海外旅行を楽しんだ	58.8	17.6	5.9	17.6	*
自分の力を試すことが出来た	23.5	58.8	11.8	5.9	*
今までより視野が広がった	70.6	11.8	11.8	*	5.9
自分に自信が持てるようになった	*	58.8	23.5	11.8	5.9

「英語を实际使って生活が出来た」と参加者全員が満足な回答をしているのも目につくところである。

次に、海外で「自分の力を試す」とした88.2%の学生のうち、「大いにそう思う」としたものは23.5%、「ややそう思う」が58.8%となり17.7%は、「どちらでもない」「あまりそう思わない」とした、不満足のままおえたようである。

また、本研修を通して、学生たちは、「今までより視野が広がった」(82.4%)、「自分に自信が持てるようになった」(58.8%)と回答しているように、20歳前後の青年にとってはこうした経験がこれからの人生において大きなインパクトを与えたといっても過言ではなからう。」

Fig. 1 研修参加目的と研修後の効果との差



4. 健康調査結果

学生たちの健康について、出発前後2回の調査を実施した。項目は次のとおりである。

- ①健康状態 ②睡眠時間 ③排便 ④ホームステイ中の傷病 ⑤ホームステイ中の不安、悩み ⑥食事について ⑦自己の健康管理

①健康状態

Table 4 に示したごとく、ホームステイ中の健康状態はほぼ良好で、出発前の調査によると17.7%のものが「悪い」としたが、研修中の健康度のほうがより高かった。

17.7%の体調の悪かった者を、各人出発前に面接をしたところ、彼女達にとっては初めての海外研修であるため、こうした不安が原因であることがわかった。こうしたことも今後の海外研修の資料としては見のがすことは出来ないものであろう。

Table 4 出発前後の健康状態 (%)

	健康である	普通	悪い
出発前の健康状態	64.7	17.6	17.7
ホームステイ中の健康状態	70.6	29.4	0

②睡眠について

睡眠については Table 5 に示すように、出発前には「7時間未満」と「8時間未満」をあわせると70.6%、ホームステイ中については88.2%と研修中の方が非常によい割合をしめている。睡眠については健康管理の基本的なものといえることから、これからもホームステイに関する指導においては、十分な睡眠と規則正しい生活を基本とすることを望みたいものである。

Table 5 睡眠調査 (%)

	6時間未満	7時間未満	8時間程度	9時間以上
出発前	29.4	41.2	29.4	0
ホームステイ中	11.8	64.7	23.5	0

③排便について

排便については Table 6 に示すごとく日本での生活の時よりもホームステイ中の方が23.6ポイントよく規則正しい生活の影響の結果と推察される。

Table 6 排便状況 (%)

	毎日規則 正しく	時々不規則	常に不規則
出 発 前	17.6	41.2	41.2
ホームステイ中	41.2	23.5	35.3

④ホームステイ中の傷病について

ホームステイ中の傷病を、7項中より選択させた。それを、Table 7 に示した。

「胃腸が悪い」が17.6%と示すように、学生たちは、アメリカで胃腸薬をたえず服用していたことが注目された。

項目中の「その他」の傷病の23.5%の内容は便秘が多く見受けられた。また35.3%が無回答であるところが気になるところである。

Table 7 ホームステイ中の傷病 (%)

風邪を ひいた	胃腸が悪く なった	歯が痛く なった	外傷をした	よく頭痛を した	よく腹痛を おこした	その他	N. A.
11.8	17.6	5.9	5.9	0	0	23.5	35.3

⑤ホームステイ中の不安、悩み

ホームステイ中、ほとんどの者が不安や悩みを持たなかったことが注目される、不安や悩みを持った11.8%のものについて調べてみると、全員が「ホストファミリーに自分の意志をうまく伝えることができず、そのことで相手が自分を理解してくれなかった」ことを悩みとしていた。

Table 8 ホームステイ中の不安や悩み (%)

不安、悩みあり	不安、悩みなし
11.8	88.2

⑥食事について

ホームステイ中の食事については Table 9 に示したごとく88.2%のものがすべて食事が出来たと回答した。これもホームステイ中の健康管理については、見のがすことが出来ない項目である。また、朝食のみについて調べたところ (Table10)、ホームステイ中は、82.4%のものが毎朝食をとっていたと回答している。相愛大学論集第14巻に

相愛大学学生生活実体調査報告（その6）

も述べたように朝食と健康の相関関係は高く学生生活においてもホームステイ中のように朝食をとる習慣をつけてほしいものである。

Table 9 食事調査 (%)

すべて食べた	一部食べなかった
88.2	11.8

Table 10 朝食調査 (%)

	毎日食べた	時々食べた	食べなかった
出発前	70.6	11.8	17.6
ホームステイ中	82.4	11.8	5.9
相愛大学生 660名の調査	69.5	23.4	7.0

⑦自己の健康管理

ホームステイ中の自己の健康管理について5項目よりそれぞれの程度について質問をした。Table 11 に回答結果を示した。

学生自身がそれぞれのホームステイ先で健康管理を自分自身でしたとした。彼女らの感想文からも伺ええるように、アメリカで病気になってはならないという不安が強くあらわれていた、たとえば、食事についても「栄養バラニスを考え」、また、睡眠時間についても「留意した」といい、「身体運動の機会もつくった」と回答している。

これを機会に正しい生活習慣を身につけたいものである。

Table 11 健康管理調査 (%)

	おおいに そう思う	普通	そう 思わない	N. A.
毎日規則正しい生活をした	5.9	29.4	64.7	*
食事や栄養バランスを考えた	17.6	64.7	11.8	5.9
睡眠を十分にとった	17.0	52.9	23.5	5.9
スポーツする機会を多くもった	29.4	52.9	11.8	5.9
その他	*	*	5.9	94.1

5. ホストファミリーとの生活

①ホストファミリーたちとどのような週末を過ごしたかについて、14項目中より回答を求

めた。Table 12が示すように学生たちは、週末をホストファミリーと共に過ごし、大活躍をしたことが伺える。生活の一部として当然のごとくアメリカ文化を細部にわたって触れ観察することが出来たものと推察される。

これらも海外語学研修の大きな成果の一つであろう。

Table 12 ホストファミリーとの週末の過ごし方 (%)

教会に行った	76.5	スポーツをした	70.6
他家を訪問した	88.2	水泳に行った	41.2
遊園地へ行った	64.7	スポーツ観戦に行った	41.2
観光地へ行った	94.1	収穫を手伝った	5.9
映画へ行った	35.3	パーティーに行った	76.5
ピクニック、キャンプに行った	82.4	その他	5.9

②ホストファミリーとの今後の付合について

海外語学研修が終了した現在において、「今後ホストファミリーとどういった付き合いをしたいと思っているか」の質問に対して次のように回答がえられた。(Table 13) これら結果からも推察されるごとく、ホストファミリーと別かれを、おしんできたように、帰国後も何らかのかたちで付合をして行こうと考えていることが調査で明らかになった。手紙で付合をするものが82.4%、つぎにもう一度デンバーに行きたい47.1%の順であった。

Table 13 ホストファミリーとの今後の付合について (%)

手紙で文通	82.4	わからない	5.9
もう一度行って	47.1	付き合いはしない	0
日本に招いて	35.3		

6. 英語授業程度評価と楽しさ

アメリカでの大学授業程度の評価について Table 14 に示した。

それによると、英語授業程度が「自分に適していた」は70.6%、「程度が低かった」としたものは17.6%、「程度が高かった」が11.8%であった。

英語授業程度の評価についてはまずまず満足度は高いといえる。次に「大学での英語の授業は楽しく受講できたか」の質問に対して、「楽しかった」76.5%、「楽しくなかった」23.5%との結果が得られ、大半のものが楽しく授業を受けていたといえる。

Table 14-1 英語授業程度評価（％）

高 い	普 通	低 い
11.8	70.6	17.6

Table 14-2 英語授業の楽しさの程度

楽しかった	楽しくなかった
76.5	23.5

そこで、さらに学生たちの心理的側面を明確化するため、これらの項目をクロス集計し考察を加えることにした。

「英語授業の程度」と参加目的である「英語（会話）を学ぶため」との関係を見るため、Table 15 でクロスさせたところ、有意な関係が認められた。

アメリカの大学で英語の授業の程度が「高かった」とした者は、英語（会話）を学ぶために本プログラムに参加した割合が高く、「低かった」とした者ほどその割合が低かった。

つまり授業評価で自分の英語力より高かったとした者は、肯定的にあるのに対し、低かったとした者はやや否定的傾向が認められた。

Table 15 「英語授業程度評価と英語（会話）を学ぶため」との関係

	英語を学ぶため	どちらともいえない	英語を学ぶためでない
高かった	100	0	0
普通だった	91.7	0	8.3
低かった	66.7	33.3	0

$$\chi^2=13.05 \quad DF=6 \quad P<.05^*$$

つぎに「英語授業の程度」と「海外旅行をしたいため」本プログラムに参加したとの関係を見るために Table 16 でクロスさせた。これも有意な関連が認められた。

大学での英語授業程度が「高かった」「やや高かった」と回答した者は、海外旅行をしたいために本プログラムに参加した割合が「おおいに思う」の肯定派と「どちらともいえない」中間派とに分かれ、「低かった」とした者は、海外旅行を目的に参加する割合が高かった。

すなわち、英語力の高い者は、海外での見聞を広めることを目的として位置づける傾向

にあるが、英語力の乏しい者は、目的にばらつきがあるといえよう。

それらの結果からいえることは、海外語学研修前の段階で学生たちに、プログラムの目的、各個人の参加の位置づけを明確にさせる必要があるだろう。また語学力のレベルアップに留意させ、語学研修に望ませる必要があるだろう。

英語学力の高い者ほど参加目的意識がはっきりしている傾向にあり、海外語学研修の効力も大きい、こうした事前のオリエンテーションは、出発前だけではなく長期に渡って計画的指導が必要と思われる。

Table 16 「英語授業の程度評価と海外旅行目的の程度」との関係

	海外旅行を目的に参加	ややそう思う	どちらともいえない
高かった	50	0	50
普通だった	25	75	0
低かった	66.7	33.0	0

$$\chi^2 = 10.86 \text{ DF} = 4 \quad P < .05^*$$

Ⅳ 総 括

本学における海外語学研修参加者のホームステイ中の生活実態を正確に把握し、今後の海外研修プログラムの在り方と課題を明確にするための基礎資料を得ようとした本研究の結果を総括すると、次のようにまとめることができる。

1. 学生の本プログラム参加目的は、全員が「海外の生活、文化を知るため」「若い時にいろいろな体験をしたいため」とし、大半は「英語（会話）を学ぶため」「自分の英語を実際に使ってみたいため」「海外旅行をしたいため」とした。」

2. 本プログラム参加前の不安についてみると、「自分の英語（会話）力」（82.4%）が一番高く、次いで「ホストファミリーとの生活」（41.2%）であった。その他の項目についても不安を大きく抱えていることが明らかにされた。

3. 出発前の参加目的がプログラム終了後どの程度、獲得、達成されたかを考察することによって本プログラムの効果をみた。

(1)「海外の生活、文化を知ることが出来た」「若い時いろいろな体験が出来た」「自分の英語を実際に使うことが出来た」「今までより視野が広がった」の4項目で70%以上の達成立が認められた。

(2)「海外に友達が出来た」「海外旅行を楽しんだ」の2項目で50%以上の達成率が認められた。

(3)その他「英語（会話）力が身についた」「自分の力を試すことができた」「自分に自信が持てるようになった」の3項目で達成度が高かった。

このようにプログラムの効果については当初の目的がほぼ達成されたものと言えよう。

4. プログラム中の学生の健康度は高く、当初心配されたよりも元気に過ごしていた。

5. ホストファミリーとの週末の過ごし方をみると、さまざまな週末を過ごしており、学生たちはアメリカ文化に触れ、観察が出来たと思われる。

6. プログラム中の大学における英語授業の程度は適当であり、大半の者が「楽しかった」とした。

7. 英語学力の高い学生は、海外での見聞を広めることを目的として位置づける傾向が強いことから、研修前の段階でプログラムの目的、各個人の参加の位置づけを明確にし、語学力のレベルアップを図る必要があると思われる。

以上の総括から、海外語学研修が学生にあたえる効果は非常に大きいことが明らかにされた。

これらの考察と総括が今後の海外語学研修の基礎資料になればと思われる。

(追) 今回のプログラム参加者が少なく、被験者不足であったことは残念であるが、今後の研究の予備調査と位置づけ今後の課題としたい。

参 考 資 料

- ① 三宅一郎、山本嘉一郎編「SPSS (statistical package for the social sciem) 統計パッケージ(基礎編)」
- ② 長野孝男(1988)「相愛大学学生生活実態調査報告(その4)」健康に関わる諸問題について」